

2019 (平成31) 年度
推薦入試
卒業生子女・弟妹入試
〔外国語学部〕
小論文問題

注意

- 1 開始の合図があるまでは、開かないこと。試験時間は六〇分である。
- 2 黒色鉛筆を使用すること。
- 3 解答用紙の所定欄に、氏名・受験番号を記入すること。
- 4 縦書きにすること。
- 5 下書きには、この用紙の余白を使用すること。
- 6 書き損じても、解答用紙は再交付しない。
- 7 この用紙は、試験終了後に回収しない。

解答要領

解答は問題文中の設問の指示に従って、解答欄に適切に書くこと。
なお、句読点・かっこなども字数に加える。また、段落の初めの空きや、段落の終わりの行にできた空きも、書いてあるものとみなし、字数に加える。

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

授業では自分がエチオピアでやってきた研究のことはほとんど話さない。いま知りたい課題を勉強しながら話すことが多い。大学は、何かを知っている人が知らない人に教える場ではない。教員と学生がともに学び考えながら、答えのわかっている問いをわかってと追究する場だ。高等教育を「研究者」が担う意味はそこにある。

今期、担当している講義のテーマは日本文化。民俗学者の柳田国男やドイツの日本研究者ネリー・ナウマンの著作を読み解きながら、仏教や神道以前からあった日本の宗教や文化の源流を探ろうとしている。

柳田は、日本の祭りなどの年中行事には、山の神が春に里において田の神になり、秋に山に戻るといった古代の信仰が広くみられると指摘した。仏教などの影響で形を変えながら、いまも各地に残っている。

ナウマンは、この山の神への信仰が縄文の狩猟文化と弥生時代に渡来した農耕文化との混淆（こんこう）だと論じた。山の神を動物の主（ぬし）とする日本の狩猟民の観念は北ユーラシアの狩猟民と一致する。農耕民の祖霊信仰や綱引き、火祭りなどの文化は古代の中国南部や朝鮮半島と共通している。

日本文化の源流に純粹な「原型」があるわけではない。むしろ現在の国境をこえて大陸へと広がる複雑なルーツが見えてくる。日本列島に暮らす私たちは何者なのか。それも未知の問いだ。

（2018年6月26日 朝日新聞 朝刊「松村圭一郎のフィールド手帳」）

問一 この文章に、適切なタイトルを15字以内でつけなさい。

問二 筆者は傍線部の「答えのわかっている問い」を「未知の問い」とも表現しています。あなたにとって、大学で問うべき「未知の問い」とはなんですか。601字以上800字以内で述べなさい。